

奥田名誉教授より、野口英世の言葉とともに力強いメッセージをいただきました。

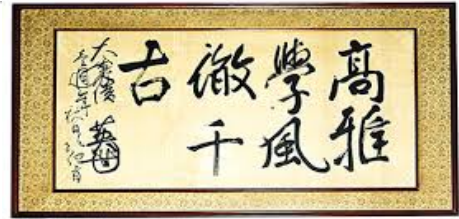
「困難な時にこそ立ち向かえ」

人類愛に生き、感染症と戦い命を落とされた野口英世先生。先生が私たちに語りかけておられます。

全てから逃げたら、歯科界の信頼は落ちるところまで落ちます。東京歯科卒業生は血脇イズムの熱いハートをもち、痛がっている歯科患者から逃げることはせず、歯科医療に誇りを持つと呼びかけています。長いトンネルでも出口は必ずあります、乗り切りましょう。

そして、歯科界に今こそ血脇イズムも必要です。「歯科医師である前に人間たれ」と・・・。

野口英世先生の書



関東大震災後に贈られてきた

Inherently refined and graceful
the esprit de corps of the school
Will live and last for million a year.

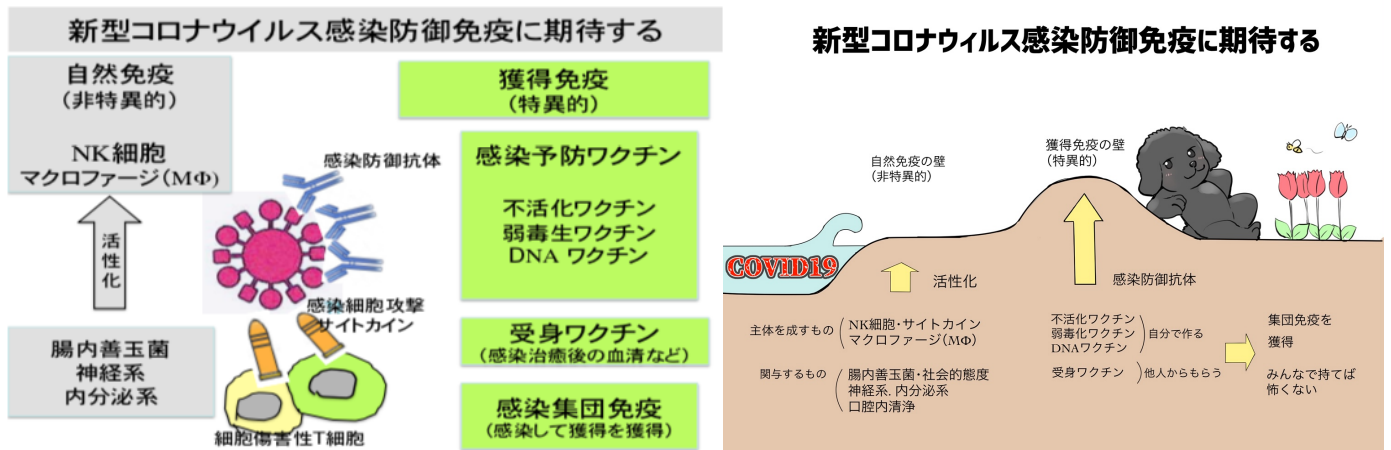
新型コロナウイルスのパンデミックからオーラルヘルスを考える

2020年5月9日 更新 東京歯科大学名誉教授 奥田克爾

感染予防ワクチン開発

第一次世界大戦中の100年前スペインインフルエンザのパンデミックは当時の過半数が罹患して免疫を獲得したことによって2年後に終息しました。

人類が叡智を結集して一日も早くワクチンを開発しなければなりません。感染を抑え、第2波の感染爆発を制御するためにはワクチンを凌駕する手段はありません。人類の感染症との闘いに終焉はないことから、ワクチン備蓄が無駄になることがあったとしても、あらゆる準備に取り組まなければなりません。



感染拡大を抑えるため3密を避けることが定着し、ソーシャル・ディスタンスが強調され、その成果が上がってきています。しかし、4月14日のScience誌には、ソーシャル・ディスタンスは2022年まで、場合によっては2024年まで続ける必要があると発表されています。厳しい状況の中で野口英世「困難な時こそ立ち向かえ」が聞こえています。歯科医療や口腔ケアに支えられるオーラスヘルスは、感染リスクを低下させ重症化を防ぐ役割があると信じています。